九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ウォードの天才論と社會主義

小林, 榮三郎

https://doi.org/10.15017/2335152

出版情報：史淵. 54, pp.41-64, 1952-12-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ウォードの天才論と社會主義

小林榮三郎

一、まえがき
二、ゴルトンの天才論とウォード
三、ウォードの階級知能平等論
四、ソシオクラシーと社會主義
五、むすび

一

アメリカ社會學の創建者の一人であり、ひろく歐米社會學史の觀點から見ても大きな存在であつたレスター・F・ウォード（Lester Frank Ward, 1841—1913）は、アメリカにおける天才論の發展史上でも一期を畫したものということができよう。かれもまだ個人主義的な社會觀・歴史觀に強くとらわれてはいたが、[1] しかしエマスンの天才論に比べると、そこには大きな相違が見出だされる。ウォードの「動學的社會學」（Dynamic Sociology, 1883）が生れた時代は、周知のごとくアメリカ社會の經濟的構造に一大變革が行われつつあつた時期で、南北戰役（一八六一——一八六五）以來いろいろの技術的改革が生産過程に適用され、蒸氣の利用、鐵道の增設などに伴なつてめざましい産業的發展が見られた。それは

近代的な工場組織が工業生産の支配的様式となろうとしはじめる時代である。資本の集中、經營の結合につれて獨占的な特權が一部の資本家に握られてゆく。アメリカの生活は、農業的類型から工業的類型へ移行しようとしている。これまでのアメリカ生活を特色づけていた個人主義だけではおさまらなくなり、資本の運用においても勞働者の組織においても、集團的傾向が強まつてくる時代である。もちろんアメリカ勞働者の組織化運動は、もつと早い時期から行われていたが、しかし全國的な勞働組合の發展は南北戰役以後のことである。シルヴィスの指導下に全國勞働組合（National Labor Union）がボールティモーで結成されたのは一八六六年であり、そこにはすでに社會主義的イデオロギーが導入されていた。有名な勞働騎士團（Noble Order of the Knight of Labor）は一八六九年に祕密結社として發足したが、祕密主義を棄てて公開團體となつてからの第一回全國大會は一八七八年に開かれ、やがて團員は一八八三年に五萬を超え、一八八六年には七〇萬に達する。社會は從來の個人主義的な自由放任政策から轉じて、産業統制および下層大衆保護の政策を必要とするようになつてきている。こうした時代の傾向のもとに、ウォードはスペンサー流の自由放任主義的な社會學説に反撥するとともに、カーライル、エマスン、ニーチェ流の少數主義的天才讃美論や、ゴルトンの遺傳偏重の天才論に反對したのである。

ベントリーの「英雄崇拜の世紀」（一九四四年刊）は、十八世紀が平等主義的思想の盛んな時代であつたのに對して、十九世紀には英雄崇拜の傾向が盛んであつたというので、こうした題名を用いている。そのなかでベントリーはつぎのような見解を述べている。すなわち、カーライルやニーチェなどの考え方をかえりみ、かれらの心のなかを覗いてみることは、大衆文明（mass civilization）と少數者文化（minority culture）との問題をとりあげることになる。いつたい、藝術家というものはデモクラシーのもとにおいて、くつろいだ（at home）氣持をいだきえたであろうか。かれらは快適な氣持で仕事をなしえたか。今日までのところ、デモクラシーは藝術家を好まなかつたといえる。一方また藝術家はデモク

ラシーを好かなかつた。というのは、狭義のカルチュアは、つねにアリストクラティックであつたからである。だから、アリストクラシーがなくなつたということは、藝術家にとつて動きがとれなくなつたということを意味している。マシュー・アーノルドがいつたように、カルチュアは完成の研究（the study of perfection）である。完成をめざして努力し研究することである。こうしたカルチュアは、すくなくとも當初においては、まず少數のものが手がける仕事である。それはわけても藝術家の仕事である。この意味において、これまでのデモクラシーは不用意であつた。だから藝術家がこれまでのデモクラシーを好まなかつたのは當然である。しかし、これからのデモクラシー、新らしい有能なデモクラシーは、單に一般の教育水準を高めるばかりでなく、それと同時に、すぐれたもの、高いもの、すなわち優秀性（excellence）のスタンダードを維持してゆかなくてはならぬ。カーライルもニーチェも藝術家であつた。トーマス・マンやバーナード・ショーや、そのほか總じて藝術家としての立場に立つひとびとが少數主義的な主張をすることがあるのも、實にこうした理由による――というのである。[2]

このベントリーの所論は、もとより多くの問題を含んでいるし、殊にいわゆるプロレタリア藝術論の立場からすればいろいろな批判が行われえよう。しかしこの主張は、藝術が究極においては萬人の胸奥にひそむものをゆりうごかすことを目ざしながら、その胸奥にひそむものをつかむためには、藝術家は自分が身を置いている時代の通俗的な藝術を脱して孤高の域に身を移さねばならぬという意味において、藝術家が少數主義的、貴族主義的立場を主張することを弁護したもの と解すべきであろう。そう解釋すれば、ベントリーの主張にも確かに傾聽すべきものが含まれているように思われる。このように見てくると、エマスンをも含めて十九世紀の英雄崇拜・天才讃美論は、ベントリーのいわゆる「少數者文化」を強調するものであり、その立場は究極のねらいにおいては必ずしも「大衆文明」を尊重する立場と相容れないものではなく、ただ一段と高い「大衆文明」の建設を目ざして、そのために現段階の「大衆文明」を否定するにすぎない、とも解さ

れよう。カーライルやエマスンやニーチェの立場も、決して永久的に大衆を輕んずるのではなく、現在の低い水準の大衆に迎合せず、まずみずからこの水準を拔いて、しかるのち大衆を高い水準にまで引上げることを目ざしていたとも解釋することができよう。

しかし、何といつても英雄崇拜・天才讃美の立場に立つひとびとの大衆觀は、大衆尊重の立場、殊に社會主義的な立場をとるひとびとのそれとは、いちじるしく異つている。わけても英雄崇拜や天才讃美の立場では、先天的能力の差が強調され、現在において社會的文化的に低位にあるひとびとはやはり先天的能力において劣つているという考え方が、その根底に深く流れているといわなければならない。こうした考え方に反撥してくるのがウォードである。しかもこの反撥には、先に述べたような社會的背景があり、なかんずく當時の社會主義的思潮がウォードに強く影響しているように思われる。從來、社會學史の立場からウォードの所說を考察したものは多數存在するが、ウォードの天才論をこうした社會主義思潮との關連においてとりあげたものは、今日までわたくしの參照しえた極めて狹い範圍に關するかぎりでは、存在しないように思われる。しかも天才論と社會主義との關係は歷史觀における個人主義と集團主義の問題につながるものであつて、十八世紀以降における史學理論史上の最も興味ある題目の一つであるとわたくしは考える。[3] 本稿においてウォードの天才論をとりあげたゆえんであるが、大方の諸賢において、わたくしの未見の文獻について御敎示を賜れば幸いこれに過ぐるものなく、また本稿における所說の過誤もすくなくないと思われるので、そうした點についても御叱正をこいねがう次第である。

二

ウォードは一八四一年イリノイ州ジョリエットの町に、巡回職人（itinerant mechanic）を父とし、牧師の娘を母とし

て生れた。當時のイリノイ州はいわゆる邊境であり、かくしてウォードもアメリカにおける多くの改革論者と同樣にフロンティアの環境のなかに育つたのである。初等教育をジョリエットで終つたのちは、農場やいろんな製造場ではたらきながら餘暇にフランス語・ドイツ語・ラテン語を學び、生物學や生理學を研究し、遂に獨學で中等學校(secondary school)教員の資格をかちうるに至つた。南北戰役に從軍すること二年にして、一八六三年五月チャンセラズヴィルの戰いに重傷を受けた。傷が癒えて一八六五年財務省に書記官として勤めることになつたのが二十四才のときである。二十六才のときからコロンビア大學の夜間コースに學び、五年間に人文(arts)、法律および醫學の卒業證書をえた。かくしてウォードはめぐまれぬ環境のうちに苦學力行・刻苦勉勵によつて知識を高めていつたのである。(4)

エマスンが一八〇三年アリストクラティックな氣風の強いニュー・イングランドのボストンにおいて牧師の家に生れ、めぐまれた環境のうちに大した苦勞もなく育つたのに反して、ウォードはデモクラティックな氣分の濃厚なフロンティアに人となり、若いときから生活と鬪いながら勉學した。エマスンがハーヴァードを卒業したのは一八二一年であり、ジャクスンが大統領となつた一八二九年にはエマスンはすでに二十六才で、ボストンのユニテリアン派教會の牧師となつている。エマスンもこうしていわゆるジャクソニアン・デモクラシーその他の影響によつて大衆の重要性を認めたのではあるが、エマスンとウォードがその思想の形成期を過した時代と環境との差は、かれらの思索の方向を大きく制約したと見なければならぬ。ウォードの官吏生活は、かれがブラウン大學に迎えられるまで實に四〇年の久しきにわたつたが、當初は統計局に、ついで國立博物館に勤めた。博物館に轉じたのは、ウォードがはじめ植物學、殊に化石植物學に興味をもち、その方面にすぐれた業績を發表したからであるが、しかし社會科學への興味も植物學研究の開始とほとんど時を同じうして強く存在していたといわれる。一八八三年に刊行した「動學的社會學」の着想は、一八七二年すなわちコロンビア大學在學中にすでに生れていて、卒業後の數年間に次第にその輪廓がハッキリと出來上つていつたもののようである。(5)「動學

的社會學」を出したのち、さらにその思想をふえんして、一八九三年には「文明の心理的要素」(The Psychic Factors of Civilization)を刊行し、一八九八年には「社會學概要」(Outlines of Sociology)、一九〇三年に「純正社會學」(Pure Sociology)、一九〇六年に「應用社會學」(Applied Sociology)を發表した。その間、一九〇〇年から一九〇三年まで「萬國社會學院」(Institut International de Sociologie)の會長となり、[6] 一九〇六年から一年間アメリカン・ソシオロジカル・ソサイエティの初代會長に選ばれている。かれがブラウン大學社會學教授として迎えられ、はじめて講壇に立つたのは、漸く一九〇六年六十五才のときのことであつた。

ウォードの天才論の骨子は「動學的社會學」のうちにすでに展開されていて、その後の著述はこれをふえんしたものと見ることができよう。かれに從えば、當時の風潮は天才讃美(an apotheosis of genius)であり、能力(ability)・才能(talent)の禮讃である。近代において社會的不平等はつねに、本質的には知能(intellect)[7]の不平等であると見なされている。優等(superiority)および劣等(inferiority)ということばは、つねに知能的(intellectual)な優劣を指している。現代の哲學はこうした區別をその樞軸として動いている。一般人の心はこうした世界觀に沒入しているために、知的能力を發揮しえないひとは一顧だもされぬ有樣である。一切の注意は少數の例外者に集中されている。その結果は、可能的(潜在的)能力(potential ability)にたいして力を發揮する機會が與えられないために、例外的なものの數さえも制限されることになる——というのである。[8] 要するにウォードの天才論は、かれのいわゆる少數者中心哲學(oligocentric philosophy)への反撥であり、わけてもイギリスのゴルトンの「遺傳的天才」(Hereditary Genius)における主張への反駁である。なかんずく階級的立場における知能的平等主義を強く主張したことは、のちのアメリカ社會學界における知能と階級との關係についての論議の口火を切つたものとして注目に値するとともに、ひろく天才論史の觀點から見ても、殊に天才論と社會主義的思潮とのつながりを考える上において、まことに興味ふかいものがある。

チャールズ・ダーウィンの従弟フランシス・ゴルトン（Francis Galton, 1822—1911）がその著「遺傳的天才」を公表したのは一八六九年のことであつた。この一書がひとりイギリスのみならず、ひろくヨーロッパの學界にセンセイションをまきおこしたのち、同じ著書によつて「イギリスの科學者」（English Men of Science. 1874）、「人間の能力およびその發達の探求」（Inquiries into Human Faculty and Its Development. 1883）、「先天的繼承」（Natural Inheritance. 1889）などが刊行された。これらの勞作はスイスの植物學者ド・カンドル（de Candolle）その他の批判に答えていろいろな問題にわたつて述べているが、それらをつらぬいて見られる主張は、すでに「遺傳的天才」のなかに展開されている。ゴルトンによると、同じ年齢の百萬人を知能の觀點から統計的に見て、普通以上のものを低い方から高い方に向つてA B C D E F Gおよびそれ以上といつた段階に分けると、高い知能の所有者ほど數がすくなくなつてくる。すなわちAクラスが四人に一人、Bクラスが六人に一人、Cクラスが十六人に一人、Dクラスは六四人に一人、Eクラスは四一三人に一人、Fクラスは四三〇〇人に一人、Gクラスは七九〇〇〇人に一人、それ以上は百萬人に一人の割合になる。普通以下のものにもこの率はあてはまる、というのである。そしてこのような知能の高低に決定的な重要性をもつものは遺傳である。「わたしは精神の活動力を發達させることに、教育や社會的影響のもつ大きな力を充分に認める。それはちようど、わたしが、鍛冶工の腕の筋肉を發達させるのに、腕を使うことの及ぼす効果を認めるのと同樣である。しかし、ただそれだけのことだ。鍛冶工に思う存分はたらかせてみるがいい。かれは自分の力の及ばない或るわざの存在することを見出だすだろう。」人間はめいめい天賦の能力をもつている。この能力は遺傳によるものだ。イギリスの科學者、ロイアル・ソサイエティ會員、そのほか天才的なひとびとの家系を調べてみると、このことがよくわかる。環境は凡庸のひとを天才につくりあげることはできない。「わたしは何びとといえども非常に高い能力にめぐまれずして、非常に高い名譽をかちうることはできないと確信するものだ。」しかも他方において、有能の人物は、不利な環境を克服するのがつねである。人

才（talent）あるいは天才の所有者は通常、中年に達するまでに、あらゆる障害をのりこえて、めぐまれた境遇に育つたひとびとの地位に追いついてきている。「イギリスの社會的生活のもついろいろの障害は、高い能力をもつた人物が傑出するのを妨げることはできない。」環境が二次的重要性しかもたないことは、同じ環境も、ちがつた遺傳的素質をもつひとによつては、ちがつた風に見られ、ちがつた風に知覺されるという事實からも明らかだ。素質がちがえば、同じ環境の刺戟もちがつた反應、ちがつた情緒、ちがつた關心をよびおこすからである。從つて、非常に似かよつた環境から全くちがつた性格、全くちがつたタイプをもつた人間が出てくるし、素質が似かよつていれば、ちがつた環境に育つても、似かよつたタイプの人間ができあがる――とゴルトンは說くのである。[9]かれも天才の問題について遺傳と環境の二つの要因を考えなければならないことは、これを認めていた。しかし、かれはそのころ廣く行われていた人間平等論にたいして、個人は肉體的にも精神的にも決して等しくないことを强調し、この個人差は遺傳と環境から生ずるけれども、大きな役割を演ずるものは遺傳であり、むしろ遺傳こそ決定的な重要性をもつものであると主張する。そこにゴルトンの行きすぎがあつた。ウォードが鋭い論難を加えたのは、まさしくその點であつた。

さきにも觸れたように、ウォードは社會學とともに植物學にふかい興味をいだいていた。かれの述懷するところによると、ゴルトンの著書に接する前に、かれはこうした植物學にたいする興味から「遺傳と機會」（Heredity and Opportunity）と題する一文をものしていた。そのなかにはすでに、ゴルトンの著名なことばたる「自然と育成」（nature and nurture）も見出だされる。そこではアメリカ熱帶地方の原住民が幼稚な方法で栽培していた高さ二フィートばかりの草がヨーロッパ人の手に育てられて一五フィートにも達するトウモロコシとなつた例によつて、「生のあらゆる部門におけるネイチュアとナーチュアの相互影響」が說かれている。荒れ地にこぼれ落ちて何の手入れも受けず、野草とのきびしい生存競爭にやつれ果てた小麥をウォードみずから發見して、當初はどうしても小麥と思えず、幾度も解剖し檢討せざるをえなかつた

體驗を引いて、「要するにこれはネイチュアとナーチュアとのちがいだ」ともいつている。「このかわいそうな萎縮した小さな草は、何かフトしたことで、この見すてられた荒れ地の雜草のただ中に蒔かれたか、こぼれ落ちたかした小麥の粒から生えだしたものだつた。それは、その場所で發芽生長し、そうして、穀物の波うつ畑に見られるあの莊嚴と美麗とに達しようと努めたのだ。ああ、しかしそれはできなかつた。この小麥は一足毎に、環境の結束した抵抗が、もはや知能によつては如何とも制しえないものであることを感じた」とウォードは書いている。このころからウォードはネイチュアよりもナーチュアに重きを置いていた。かれによれば、眞の社會科學は、完成に近ずくにつれてますます人類の利益のために應用されうるものでなければならぬ。宇宙進化の法則をあまりにも狹く解釋して科學的決定論におちいり、「絶望の哲學」にむしばまれてはならぬ。後年のウォードの社會學は、要するにこうした「絶望の哲學」に對抗して　人間の知性にみちびかれた意識的努力の有効性を說くことを眼目としたものといえようが、このような社會教育者としてのウォードの本領は、すでにこの若き植物學者ウォードのことばのうちにその萠芽を示していたといわねばならぬ。のちにゴルトンの著書をひもどくに及んで、ウォードはすぐにネイチュアの偏重とナーチュアの輕視とに氣づいた。[10]

しかしウォードは「遺傳的天才」におけるゴルトンの主張の全部にたいして反對するものではなかつた。ウォードにおいても、天才はその本質においてやはり遺傳的なものであり、ナーチュアはキャベツをカシワの木に變じうるものではない。天才とは或る特殊の仕事をするのに適する天賦の精神的能力であるがゆえに、それは、普通に「能力」(ability)と呼ばれるものとはちがう。アビリティは、生得の精神的能力のほかに、後天的にえられた知識や經驗を含んでいる。從つてアビリティは教育によつてこれを增加することができる。しかるに天才は生得のもの、遺傳的なものだけを指すのであるから、教育の効果は及ばない。かくして天才が遺傳的なものであるというゴルトンの主張の根本は、ウォードにおいてもやはり正しいものと見なされている。ただゴルトンの弱點は、かれが行つた副次的な主張、すなわち、表面にあらわれ

た天才、業績をあげた天才だけが唯一の天才であるとするところにある。かれは現實の天才（actual genius）のほかに可能的天才（potential genius）のあることを認めないのであつて、ここに大きな誤謬がひそんでいる、とウォードはいうのである。一九一三年に「アメリカ社會學雜誌」に出したウォードの論文によると、天才は全人口の〇・一パーセントの割合で存在し、精神的不具者が〇・五パーセントで、殘り九九・四パーセントのあいだには、生得の精神的能力の甚だしい差異はない。しかし、この平凡に見えるひとびとのすくなくとも半數のなかには、天才や特殊才能が、不利な環境のために發達せずに埋もれているはずだ、とウォードはいう。[11] このようにしてウォードは、一方において天才が遺傳的なものであることを肯定しつつ、他方において可能的天才の存在を指摘することによつて、天才の問題における環境の重要性を強調したのである。ハウスがその「社會學の發展」（一九三六年刊）のなかで評しているように、ウォードのこうした觀測はいわゆる希望的思惟（wishful thinking）から出たもので、資料の冷靜な調査にもとずくものではない、ということもできよう。[12] ここにも社會科學者としての冷靜さよりむしろ社會教育者としての熱情が、ウォードのうちに強くはたらいていることは事實であろう。このことは、かれが社會階級の知能差の問題に觸れてくる場合に、一段と明瞭に理解される。

三

ウォードによると、社會上層の諸階級と下層の諸階級とのちがいが先天的な精神的能力のひらきにもとずくとする見解は、全く誤りである。なるほど、そこには後天的知力（intelligence）のちがいはある。そのちがいは非常に大きいものだ。しかし先天的知能（intellect）のひらきは存在しない。そもそもインテリジェンスというものは、先天的知能プラス知識（intellect ＋ knowledge）である。インテレクトは先天的であり遺傳的であるが、知識は後天的にかちえられるも

のである。下層階級はそのめぐまれぬ環境のために、知識の獲得において甚だしく劣つているにすぎない。もし、或る時代、或る地方において、すぐれた精神的能力を示す階級に屬する若干數の個人を、最も低い社會層の環境と全く同じ環境のなかで小さいときから育てるならば、かれらは不可避的にその最下層のものの精神的水準に止まらざるをえないであろう。逆にこれと同數の最下層の乳兒を、上層の環境と正確に同じ條件のもとに育てあげたならば、かれらは上層的水準に達しえたであろう。「換言すれば、社會における階級別は全く人爲的なものであり、もつぱら周圍の條件に依存するものであつて、どの點から見ても生得の能力における差異にもとずくものではない。」もちろん生得能力の個人的差異はある。「しかし、そうした差異はすべての階級に等しく存在する。」社會の上層が人間の精神的能力を獨占しているように見えるのは、かれらが經濟的・社會的・教育的環境によつて、一段と自由な知的雰圍氣のなかに入りうるからだ。しかるに現在、世界を風靡している哲學は、知能の優劣を樞軸とする哲學であり、ニーチェ的な少數中心の哲學である。科學も美術も文學も、知性的な面にのみ注意を集中して、天才禮讃・才能讃美を事としている。かがやかしい知的業績を示しえないものは、全くかえりみられない。しかるに大衆はつねに凡庸である。この凡庸な大衆は無視されている。一切の注意は少數の例外だけに集められている。その結果は、こうした例外的存在そのものの出現數を低下することとなつている。なぜなら可能的（potential）・潜在的（latent）能力の發達する機會が與えられていないからだ。しかし、こうした誤つた精神を吸收しない唯一つの科學がある。それは社會學だ。社會學の觀點はまさしくその反對のものである。なるほど純正社會學は、事實（fact）・原因（cause）・原理（principle）をとりあつかう。けれども社會學の目的は、あくまで社會・人類の改善にある。從つて純正社會學とても、この目的の手段として研究を行うのである。應用社會學に至つては當初から社會改良の目的に立ちむかうのであるから、このような少數中心の見解は斷乎として排擊すべきである。社會階級の歴史をかえりみるならば、下層に屬しているものは、かれらが上層を占める能力を欠いでいたがためにそうなつたので

ないことは明らかである。第三身分たるブルジョワジーは、かつては精神的能力の劣つているものと考えられていた。しかるに今ではこの階級がトップに立つている。このブルジョワジーこそ、過去二世紀間に世界の頭腦を供給したものであつた。天才はあらゆる階級に存在する。ゴルトンの一派は、偉大なるひとびとが卑賤から身を起して傑出した地位に上つていつたことを指摘している。しかし、その事實こそ同時に、かれらが承認をしぶつている天才の遍在性を物語るものではないか。すぐれた業績をあげることのできたひとびとだけがこの地上に存在する天賦の才能の所有者の全部であつたとすることは一つの假説にすぎず、しかもこの假説を證明する何ものも存在しないのである。むしろわれわれの常識と理性と經驗とは、かくのごとき假説を不合理きわまるものと見なさせる——とウォードは論じている。[13]

天才は生れるものであつて作られるものではない、という意見は十八世紀においてすでに盛んに唱えられた。これにたいして環境萬能論ともいうべき主張をひつさげて起つたのは、フランスのエルヴェシュス（Helvétius, 1715—1771）であつた。かれの「精神論」（De l'esprit）は一七五八年に出て非常な當りをとり、十九世紀に入つても、たびたび版を重ねた。[14] ウォードの「應用社會學」のなかにエルヴェシュスの名が幾度も出てくるのは、マルクス派のひとびと、なかんずくプレハーノフなどがエルヴェシュスを高く評價していることとともに、天才論史の觀點から興味ふかいものがある。もちろんウォードはマルクス主義者でも環境萬能論者でもなかつたけれども、社會階級の知能平等論に至つては、この兩派の主張に通ずるところがすくなくない。

もとより、こうした階級知能平等論にたいしては、のちのアメリカ社會學者のあいだに相當強い反對論が唱えられた。たとえばブッシーはその「社會學原理」（一九二三年刊）において、ウォードが社會淘汰の問題を考慮に入れていないことを論難している。すなわち奴隷制度の廢止以來、社會の最下層に屬する個人で高い能力をもつたものが社會的に上昇することは、たしかに可能であつた。またデモクラシーの普及とともに社會階級の可動性が增大したのであるから、上昇運

動は一段と容易になつてきている。その結果、最低階級は有能分子を中流階級に送りこみ、他方、中流階級の劣等分子は最低階級に轉落する傾向にある。こうした二つの動きの結果として、最低階級はほかの階級に比べて有能者の割合がすくないことは當然考えられるところであり、實證的研究もこれを裏書きしている。ただ、現在の階級構成が能力の差を正確に反映していないということ、また下層階級の能力は、もつと訓練をほどこせばさらに向上しうるということは、一般の意見の一致するところで、ウォードの論旨はそのかぎりにおいて肯定される——とブッシーはいうのである。[15] ソローキンもまた「現代の社會學理論」（一九二八年刊）のなかで、社會層のあいだの精神能力の差を環境的要因だけで説明することは不可能であり、遺傳を併せ考えなければならぬ、とする立場をとつている。[16] なおウォードは階級間のみならず種族間の知能差をも否定したが、ここには詳述しない。[17] さらにウォードはオダンの研究[18]にもとずいて、生得の精神的能力はあらゆる地域においてほぼ等しいと主張し、高い名譽をかちうるひとは田舍よりも都市にいちじるしく多數あらわれることの原因を環境のみに求め、都市が教育および文化の中心地であることからこれを説明しようとしている。これは階級知能平等論というよりも地域的知能平等論とも呼ぶべき意見であるが、やはりウォードの環境重視の傾向をよく示していると思われるので、ここに付言したわけであるが、これについては「アメリカの科學者」の著者J・マッキーン・キャテルも、アメリカの科學者の出身を地域的に調べて、或る文化的中心地は田舍の百倍もの率で科學者を出している事實を指摘し、この現象は遺傳からは説明できない。遺傳的にこれほど甚だしい差異があるはずはない。これは人口密度・富・機會・制度・社會的傳統・社會的理想などによつて説明さるべきものだ——といつている。しかし、さきにあげたブッシーによると、この解釋は移住という事實の存在を忘れている。文化の中心地は永い年月にわたつて地方から有能な人材をひきつけてきた。これらの移住者の子孫は遺傳的に高い能力をもつているので、都市における優秀分子の率を增加させる。合衆國において、才能や指導力に富む若いひとびとの離村がしばしば農村の不振を招く原因となつていることは、農村社會學者

たちのひろく認めている事實だ――とブッシーは反駁している。[19]

ウォードの階級知能平等論については、そのほかにもアメリカの多くの社會學者によつていろいろの批判が加えられたが、それらを詳細に跡づけることは本稿の主眼ではない。われわれはこうしたウォードの見解が當時の社會主義的思潮といかなる關係にあるかという問題を考えてみなければならない。

四

「動學的社會學」のなかでウォードはこういつている。「何ゆえにこの書物において社會的經濟的大問題（the great social economic problems）がほとんど言及されていないか、また幸福は欲望の對象を所有するか否かに依存するところが大きいのに、何ゆえに教育の分配よりもむしろ富の分配が力説されていないのか、さらに文明と野蠻、インテリジェンスと無知との對照はかくも強調されながら、何ゆえに富と貧、『進歩と貧困』のコントラストは論じられていないのか、とあやしむひともあろう。こうした一切の非難にたいするわたしの回答は、この著述の唯一の目的が、最初の手段（initial means）に到達すること、すなわちまず最初にとるべき手段はいかなるものであるかを究明することだけであり、實際に餘白もないのであるが、たとえスペイスがあつたとしても、社會改革を論ずるひとびとの共通にいだく目的に到達するための他の一切の手段は、わざと（purposely）ネグレクトされるであろう、ということである。いまや社會主義者たちは、かれらが總じて、みずから建てようと望んでいる建物の基礎工事をしないで、屋根をつくつていることを認識すべき秋である。わたしは、かれらが現在骨を折つてつくつている材料の大部分は、社會がそれを使う用意ができた曉にも役に立たないというのではなく、社會改革を可能ならしめるような基礎的原理を明らかにすることに時間をかけた方が優れているだろう、というのである。この方向において現在行われているいろいろな試みは主として、必要な手段を用いず

に、目的であるところの進歩に、それどころか幸福に、じかに（directly）到達しようとしていることになる。從つて、かれらの努力は時期尚早であると同時に、かれらの失敗もまた確實である」と。[20]

ウォードは資本家と勞働者の問題を、知識の大小の問題に歸着させている。知識は力である。富者はただその相對的に優れたインテリジェンスのゆえにのみ、資本家としての地位を占め、貧者はただその相對的な無知のゆえに、すなわち劣つたインテリジェンスのゆえにのみ、勞働者の位置にある、とウォードは考える。かくしてウォードの最も強調するところのものが教育の機會均等であることは當然であろう。もし教育を拔きにして社會改革を行うならば、換言すれば、一般大衆のインテリジェンスがもつと高められないならば、或る一つの形の搾取（exploitation）は排除されても、他の形のそれがふたたび忍びこんでくるであろう、とかれは論ずる。このようにインテリジェンスを重視することは、かれの社會學の根本的立場が主知主義（intellectualism）とも呼ばれることに關連している。ウォードによれば、社會現象の根底には社會力（social force）がある。しかし人間の社會が動物社會と異るゆえんは、これらの社會力のほかに、これを指導するものとして人間のインテリジェンス（知能プラス知識）が存在するということである。人間の社會は意識されぬ力による受動的所產ではない。インテリジェンスは科學的知識によつて宇宙の法則を利用し、社會的環境をも變えてゆく、とウォードは考える。このようにインテリジェンスを重視するがゆえに、社會問題の解決についても、まず第一にとるべき手段は教育の普及である、とする。かれは自分の立場を、コントの使つたことばを用いてソシオクラシー（sociocracy）と呼んでいる。[21]

ウォードは、社會的不正の改革、社會正義の樹立は個人主義によつてではなく、教育の普及によつて行わるべきである、と論ずる。個人主義は人爲的不平等（artificial inequalities）をつくり出したが、ウォードのいうソシオクラシーはこれらの不平等を廢止する。また社會主義は人爲的平等（artificial equalities）をつくり出そうとしているが、自然的不

平等（natural inequalities）についてはこれを承認する。しかるにソシオクラシーでは、個人主義者が主張しているように、ひとは功績（merit）に應じて報酬を受けるが、すべてのひとに均等の機會が與えられるので、今日一部のものだけが所有している特惠的利便は廢止され、自然的不平等が除かれる。教育の普及のためには、まず義務教育（compulsory education）・一般普通教育（universal education）を實施しなければならぬ――というのである。[22] ウォードがすでに「動學的社會學」以來、聲を大にして義務教育の必要を力說しているゆえんは、この著述の出版された一八八三年前後におけるアメリカ初等教育の狀態をかえりみることによつて理解されよう。この國で義務教育制がはじめて實施されたのは一八五二年マサチューセッツ州においてであるが、その後一八八二年までに義務教育制を施行したのはヴァーモント（一八六七）、ニュー・ハンプシャー（一八七一）、ミシガン（一八七一）、ワシントン（一八七一）、コネティカット（一八七二）、ニュー・メキシコ（一八七二）、ネヴァダ（一八七三）、ニューヨーク（一八七四）、カンサス（一八七四）、カリフォーニア（一八七四）、ニュー・ジャージー（一八七五）、メイン（一八七五）、ワイオミング（一八七六）、オハイオ（一八七七）、ウィスコンシン（一八七九）の一五州だけで、「動學的社會學」の出た一八八三年にロード・アイランド、イリノイ、ノース・ダコタ、サウス・ダコタ、モンタナの五州に行われ、その他の二七州にはまだ實施されていなかつた。[23]

このようにウォードは社會主義とソシオクラシーを區別するのであるが、さきにも引用したように、かれは社會主義者の志す社會改革を全く否定し去るものではなく、單に社會改革の基礎的事業としてまず教育の普及が先決問題であると主張するにほかならない。社會主義者が所有制度の改變を先決とするのにたいして、着手の順序が逆であるというのがウォードの考え方である。いまここでは、かれのソシオクラシーを詳述する餘裕はないが、そもそもウォードがこうした考え方をとるに至つたことが、社會主義的思潮の影響によることはいうまでもない。

マルクスがホレイス・グリーリのニューヨーク・トリビューン紙に通信を送つたのは、一八六一年から翌年にかけてで

あつた。一八六一年といえば南北戰役のはじまつた年であり、この戰役は一八六五年まで續いている。マルクスはずいぶん力を注いで通信を送つたにもかかわらず、ドイツから亡命してきていた少數の社會主義者を除いては、アメリカ知識層のあいだにこの通信による直接の大きな影響は見られず、その後もマルクスの主たる著述もほとんど讀まれなかつたようである。しかし、これよりさき一八五〇年ウィリアム・ワイトリングは社會主義的新聞 Die Republik der Arbeiter をアメリカで刊行した。すなわち一八四八年後の反動のためにアメリカにわたつたドイツの亡命者を中心として、ヨーロッパ風の急進主義がアメリカにも移植されたわけである。一八四八年に公表された「共産黨宣言」も、ほどなくアメリカに傳えられている。いうまでもなく一つの文化が他の文化圏に移される場合、最も有力なのは移住であつて、ドイツからの亡命者はイリノイやミズーリのような西部までも入つていて、このひとびとによつてヨーロッパのラディカリズムが傳えられたわけである。一八五〇年にはニューヨークに社會主義の一協會が創立された。産業都市のラディカルな小集團はビールを飲みながら、革命の近ずきつつあることを倦きもせずに論じていたといわれる。一八六四年ヨーロッパでマルクスを主たるプロモウターとして第一インターナショナルが結成されると、早くもこのインターナショナルは二三ケ月を經てアメリカの産業中心地に、はじめドイツ系、のちフランス系の勞働者のあいだに支部をもつようになつた。こうした動きはアメリカ人のあいだに非常な恐怖心をひきおこした、とビアードはその「アメリカ文化の興隆」（一九二七年刊）のなかに書いている。[24] もちろんアメリカの社會科學者で唯物史觀を原典ととり組んで一應消化し、これを紹介批判したのはコロンビア大學のセリグマンの「經濟的歴史觀」（一九〇二年刊）をもつて最初とするのであつて、[25] それまではアメリカのアカデミックなサークルのあいだでは唯物史觀は充分に注意されていなかつた。けれどもビアードは、もし「第二次アメリカ革命」すなわち南北の抗爭がなかつたら、「一八六〇年までに社會主義者たちは相當のあらし（a considerable tempest）をまき起したかもわからない」と書いている。[26] このビアードのことばは檢討の餘地がある。たしかに南北の抗

爭も社會主義者がアメリカで「相當のあらし」をひき起しえなかつた原因の一つではあろうが、しかし主たる原因は、奴隷問題その他をめぐる南北の對立抗爭よりは、やはり當時におけるアメリカの資本主義的發展の未熟さに求めらるべきであろう。いずれにもせよ、ウォードはマルクス主義者ではなく、またマルクス主義の詳細な知識もおそらくもたなかつたであろう。また、かれは社會主義者と呼ばれることをも好まなかつた。さきにも述べたように、かれは社會主義者と呼ばれるひとびとが、建築の基礎工事からはじめずに、屋根からつくりはじめていることを強調した。しかしそれにもかかわらず、かれが社會主義者の所說なるものをとりあげて、これを批判していることによつて、こうしたひとびとの主張を知つていることは明らかであり、また、かれが階級知能平等論を唱え、少數中心主義でなく社會の下層大衆を尊重すべきことをくり返し說いていることは、當時の社會主義的思潮の影響を考慮に入れなければ理解できない。それどころか、ウォード自身の考え方も廣義における社會主義に屬するとさえ、いうことができよう。[27] これを要するに、ウォードの天才論は社會主義的思潮とアメリカの經濟的社會的變化とウォードの個人的環境および資質の所產であると見なければならぬ。

五

ゴットフリート・ザーロモンは「社會諸科學事典」の「英雄崇拜」の項に、「ウォードが『純正社會學』において示したように、あらゆる革新・發見および發明は、その跡をたどつてゆくと、小さな增加およびその結果 (small increments and their effects) による徐々の改良に、また集團の成熟度ならびに集團が變化を必要としていること (the group's degree of maturity and its need of change) に到達する。かくて天才は單に先驅者あるいは終局的結果にすぎないように思われる」と述べている。[28] これを見ると、ウォードはいわゆる集團主義的歷史觀・社會觀に立つているかのように考えられる。たしかにかれは、これまで見てきたように天才論において階級的知能差を否定し、下層大衆尊重の必要を力說

している。しかし、ウォードの社會學理論がその本質においてなお依然として個人主義的傾向を強く保持していたことは、ボーデンハーファーがすでに指摘したところである。

「動學的社會學」のなかでウォードは、科學的發見のために拂われる努力がほとんど無報酬で行われねばならぬことを歎いている。それどころか今日まで、そうした努力の多くは却つて強い反對に出くわし、科學のための殉教者すら出なければならなかつた。進歩的思想を述べることは歡迎されないし、いわんや報酬を支拂われはしない。金のもうかる仕事は非進歩的（non-progressive）である。現狀維持のためにのみはたらくもの、たとえば弁護士・司法官そのほか政府の役人というようなものが最も報酬が多い。文學の世界では、原稿の賣れる作家といえば、ただ事實を現狀のままに記述する連中だけだ。遠い過去に事態はどうであつたか、また遠い未來にどうなるべきか、現在どうなくてはならぬかを語りうるひとびとは、無報酬ではたらかねばならず、おまけに絶えず反對に出あわねばならぬ。だから今日まで世界の前進に貢獻してきた三つの階級、すなわち機械發明者・科學的發見者・哲學的思索家は、ただ愛の勞働のみを營んできたのである。しかし、かれらは現在のためではなく、未來のためにはたらくのである。かれらは自分たちの努力が己れの生きているうちに實際に成功を收めるであろうと期待することは稀である。そうとすれば、どうしてかれらは物質的報酬を求めるはずがあろうか——とウォードは述べている。[2] こうしたウォードのことばにも、われわれは人類文化前進の基本的推進力として大衆を考えるというような立場がとられていないことに氣づくであろう。こうした個人主義的歴史觀は「動學的社會學」のあちこちに頭を出している。ウォードは少數中心哲學の流行を歎き、下層大衆のなかに多くの可能的天才の埋もれていることを強調し、大衆尊重の必要を高く叫びながら、しかも人類の進歩に何らかの貢獻をなしたものは、ほんの少數に過ぎなかつた、といつている。そこには、大衆こそ社會の進歩の本當の擔い手であり推進力であつたというような集團主義的あるいは社會主義的歴史觀の主張は見出だされない。今日までの社會の進歩はすべて、「いわば一握りほどの少數

者」(a mere handful, as it were) によつて成しとげられたものであつて、「大衆はその恩惠の受動的受容者として以外には、その過程にたいして全くの局外者として止まつていたし、現在なお止まつている。」(……; the great mass having remained, and still remaining, entire strangers to the process except as the 'passive recipients' of its benefits.)[30] 人類は進歩的存在だといわれるが、動物もすべて進歩する。人間はどの程度まで動物とちがつた意味で進歩的存在であるかを考える場合に忘れてならぬ重要なことは、こうした進歩に「貢献する」(contribute) ものが、「人類の一部、しかも比較的小部分」(a part of the human race, and a comparatively small part) にすぎないことだ。「文化が前進しつつある國民においても、大多數のひとびとはその前進にたいして絶對に何らの貢献もしていないのであつて (the great majority contribute absolutely nothing to its advancement)、單に動物の機能、すなわち自己の生活を維持し種族を保存するという機能を果しているにすぎない。非常に少數のひとびと、すなわち事物の精神的および物質的研究者が、あらゆる進歩的制度を創始するのである。(a very few, the mental and material investigators of things, originate every progressive institution.) 社會における一切の人工的進歩は、單にこれらの少數者のみのお蔭である。(It is to these few only that all artificial progress in society is due.)[31]」發明や發見などの獨創的な仕事には「特殊な性質の精神」(the particular quality of mind) が必要だ。[32] しかし、「大衆はつねに凡庸たらざるをえない」(Mediocrity, which must always embrace the great mass……) とウォードは書いている。[33]

以上、天才論を中心としてウォードの所說をかえりみたのであるが、かれが社會主義とソシオクラシーとを對立させながら、社會主義的思潮の影響を濃厚に受けて少數中心主義の天才論に反撥したことは、天才論と社會主義との關係を考える上にきわめて興味ある事實である。フリッツ・マウトナーはその「哲學辭典」の「理想人」の項において、つぎのように述べている。すなわち、ルネサンス以來五〇〇年のあいだ、個人主義・天才崇拜というルネサンス的理想の食物または

肥料たりしものは下層大衆への嫌悪（der Ekel vor dem Pöbel）であつた。この下層大衆嫌悪こそ、復興期の歎賞された血なまぐさい人間どもの一切の蛇行を説明し弁護するものである。それはまたマッキアヴェルリの君主論をも説明し弁護するところのものである。ルネサンスはキリスト教的な現世逃避（Weltflucht）に代うるに、古代的下層大衆逃避（Pöbelflucht）をもつてした。「われ俗悪なる下層大衆を嫌悪し、これを遠ざく」（Odi profanum vulgus et arceo.）ところが社會主義という新らしい信仰がキリスト教から非キリスト教的（unchristlich）に、無神的（ungöttlich）に、あるいはまた原始キリスト教的（urchristentümlich）に發生して以來、この社會主義はこうした下層大衆嫌悪を許容せず、また天才的な人間、超人というようなものを認めない。社會主義は一切を大衆のために、また大衆によつて行おうとしている――というのである。[31]

たしかに社會主義は下層大衆嫌悪を許さない。しかしながら、社會主義は天才的な人間を認めないとすることは、明らかにいい過ぎである。すでにエンゲルスはフォイエルバッハ論のなかで書いている。「わたしとマルクスの四〇年の協働の以前とその協働中に、わたしがこの理論の建設と完成に、獨立に或る程度の寄與をしたことは、わたしといえども否定できない。しかし指導的な根本思想の大部分、殊に經濟學と歴史の領域におけるもの、とりわけその根本思想の決定的な鋭い把握はいずれもマルクスに屬するものである。わたしが寄與したせいぜい一二の專門に屬する部分を別とすれば、わたし無しにもマルクスが獨力で仕上げることができたものである。しかしマルクスが仕上げたものを、わたしが仕上げることはできなかつたと思う。マルクスは他のわれわれすべてのものより高い立場に立ち、より廣く見渡し、より速く、またより敏速に見透した。マルクスは天才であつた。他のわれわれはたかだか能才であつたのだ。マルクスがいなかつたら、この理論はとうてい現在あるようなものではありえなかつたであろう。だからこの理論がマルクスの名を冠しているのは全く當然である」と。ウォードはいわゆる社會主義者ではなかつたけれども、かれの説いたソシオクラシーは社會主

義にかなり近い考え方をとるものである。それにもかかわらず、ウォードは決して天才的な人間を否定するものではなかつた。むしろウォードは根本においてやはり天才尊重の立場をとるものである。このように見てくると、マウトナーのとらえ方はあまりにも單純であるといわざるをえない。

註

1 W. B. Bodenhafer: The Comparative Rôle of the Group Concept in Ward's *Dynamic Sociology* and Contemporary American Sociology (The American Journal of Sociology, XXVI. 1920).

2 E. R. Bentley: A Century of Hero-Worship. A study of the Idea of Heroism in Carlyle and Nietzsche with Notes on other Hero-Worshipers of Modern Times. pp. 8—9.

3 ここに史學理論史というのは廣義の史學史の一部門である。通常「史學史」と呼ばれるものは主としていわゆる歴史家の筆になる歴史叙述の歴史であるのにたいして、わたくしは史學史のうち特に史學理論の歴史をとり扱うものを史學理論史と呼び、ひとり「歴史家」のみならず、これまで歴史哲學者・社會學者・經濟學者・政治學者とされていたひとびとの理論であつても、その他いかなるひとの理論であれ、それが歴史現象の合理的説明を企てるものであれば、史學理論史の對象とすべきであると考える。けだし、歴史學は社會科學の一部門であり、總じて社會科學は實證・理論・應用の三つの面をもちうべく、歴史學はすくなくとも實證史學と理論史學との二つの部門をもつべきであり、實證史學は歴史事實を實證的に、すなわち史料にもとずいて明らかにすることを目的とし、理論史學はこの實證史學によつて明らかにされた歴史事實を最も合理的に説明するための理論を樹立することを使命とするからである。史學理論史はこうした意味における理論史學の發展史であり、史學理論の展開の跡をかえりみることを課題とする。そして天才論史はこのような史學理論史の一部であるとわたくしは考えている。天才論史の課題と方法については「西洋史學」第四輯所載拙稿「十八世紀フランスにおける天才論の性格」參照。

4 R. Hofstadter: Social Darwinism in American Thought 1860—1915 (Philadelphia, 1945), p. 53. 安西正夫「社會學史概説」四一頁參照。

5 Cf. Hofstadter, p. 54.

6 安西正夫「社會學史概説」四二頁に「一九〇三年には萬國社會學院の會長をつとめた」とあるのは、一九〇〇年から一九〇三年までの誤りであろう。Cf. Encycl. of the Social Sciences (Article "Ward").

7 ウォードは今日の使い方とは逆に、インテレクトを先天的遺傳的精神能力の意味に、そしてインテリジェンスを先天的精

神信力と知識との和の意味に用ゐられる。

8 Ward : Applied Sociology. A Treatise on the Conscious Improvement of Society by Society. pp. 23—24. Dynamic Sociology, Ⅱ., pp. 368, 611—612.

9 吉雄氏小著「天才と信仰」(東京文書)。 Cf. P. Sorokin : Contemporary Sociological Theories (1928), p. 253.

10 Applied Sociology, pp. 122—128.

11 Dynamic Sociology, Ⅱ., pp. 472, 475, 611. Applied Sociology, p. 115 sqq. Pure Sociology, pp. 36—37. Cf. F. N. House : The Development of Sociology (1936), p. 234.

12 House, p. 234.

13 Dynamic Sociology, Ⅱ., pp. 475—476, 610—612, Applied Sociology, pp. 92—116. Pure Sociology, pp. 446—447.

14 拙稿「ヨルダンニスの天才論における矛盾」(哲學四〇卷)参照。

15 F. A. Bushee : Principles of Sociology, p. 378.

16 P. Sorokin, pp. 279—281.

17 Applied Socio ogy, p. 107.

18 Odin: La genèse des grands hommes, gens de lettres francais modernes (Peris, 1895) (未見)

19 J. Mckeen Cattell : American Men of Science. Cited in J. O. Hertzler : Social Progress (1928), p. 155. Bushee, pp. 378—379.

20 Dynamic Sociology, Ⅱ., pp. 596—604.

21 Dynamic Sociology, Ⅰ., 60. Cf. Hofstadter, p. 66.

22 Dynamic Sociology, Ⅱ., pp. 607—613.

23 R. G. Boone : Education in the United States (New York and London, 1915), pp. 327—330 F. Eby : The Development of Modern Education (N. Y, 1936), pp. 881—882.

24 Beard : The Rise of American Civilization, Ⅱ, pp. 250—251.

25 E. R. A. Seligman : The Economic Interpretation of History.

26 Beard, pp. 250—251.

27 しかし新明正道氏が「社會科學大辭典」(昭五)のウォードの項に「彼は、スペンサアに反對して個人主義の代りに國家社會主義を唱へた」と書いてゐられるのは、承服しがたい。

28 Encyclopaedia of the Social Sciences (Article "Hero Worship" by Gottfried Salomon).

29 Dynamic Sociology, Ⅰ., pp. 78—79.

30 Ibid., Ⅱ., p. 72.

31 Ibid, pp. 174—175.

32 Ibid., p. 388.

33 Ibid., p. 368. Cf. Ⅱ., pp. 12, 72, 175. (Only a few contribute any thing to progress.—Index, Ⅱ, p. 679.) 「應用社會學」一三三頁には、「ある何らかの事情で含る國(country)の

英（the élite）がとり除かれることになったら、その國は知的停滯の狀態（a state of intellectual stagnation）に殘されるであろう」とさえいっている。

34 Fritz Mauthner: Wörterbuch der Philosophei (Art. Idealmenschen).

（一九五二・一〇・三〇）

Relation of Ward's View on Genius to Socialism.

by E. Kobayashi

It seems to me that the relation of Lester F. Ward's view on genius to socialism thus far has not been studied with sufficient attention. Generally speaking, however, the relation of views on genius to socialistic current of thought is one of the most interesting problems in the history of modern historical theories, because such a relation is in connection with problems of individualism and collectivism in the interpretation of history. In this article I researched Ward's view on potential genius, its background and especially its connection with his conception of "sociocracy" and socialism. Ward protested against Golton's view. He

was influenced by socialistic current of thought, but he himself, too, remained a genius-worshipper in a sense. Therefore, Fritz Mauthner's opinion that socialism recognizes no man of genius (Wörterbuch der Philosophie, Artikel Idealmenschen), must be said to be too simple.